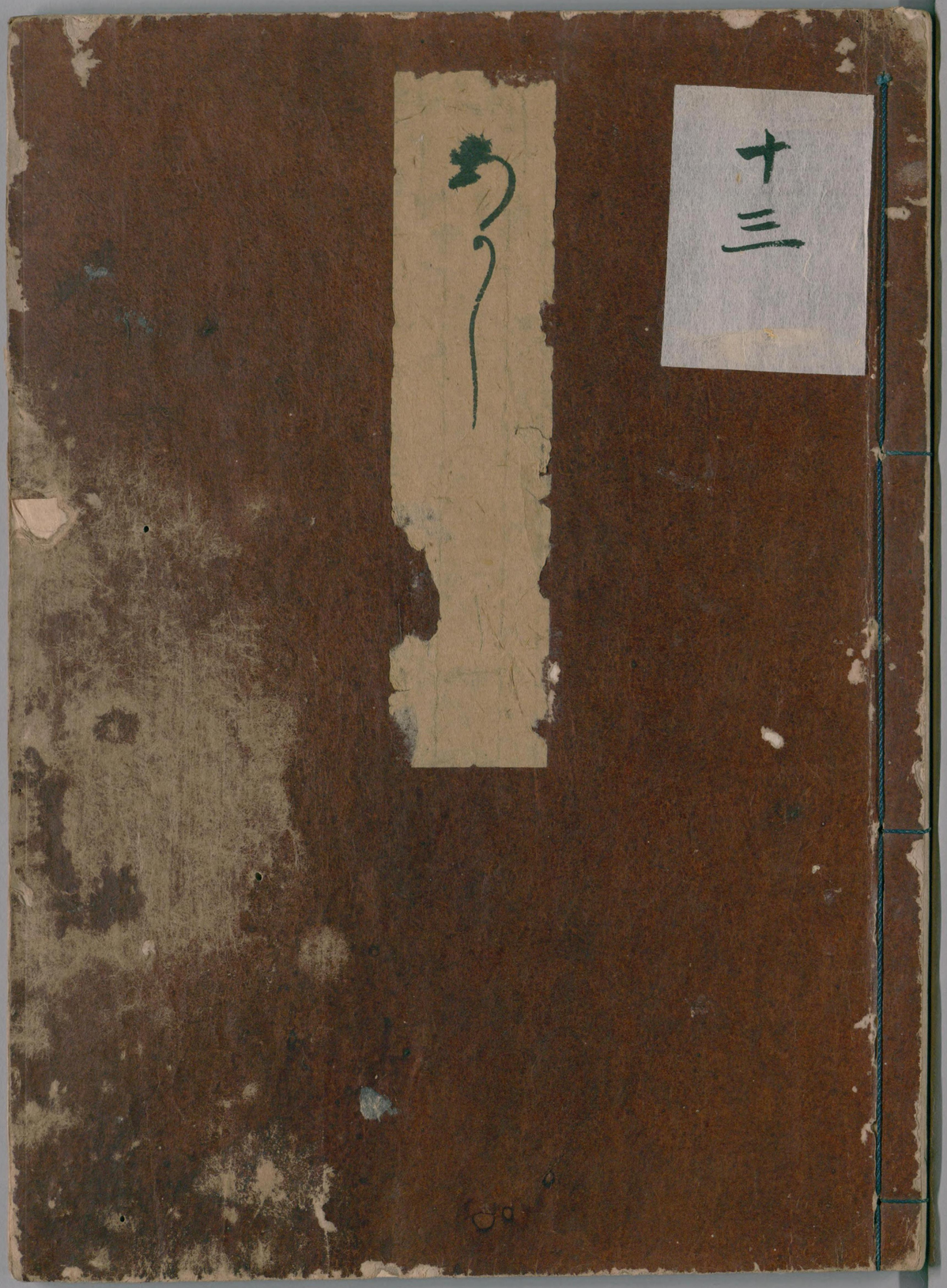
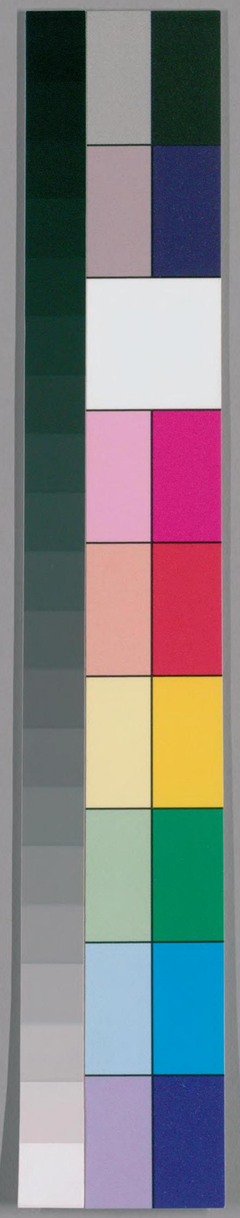

十三



国立国会図書館　　タイトル『[源氏物語] 54巻』　請求記号

ガラス使用

第十三

共五十四巻

渡利邑

松浦氏

富 2011.26 国会図

る後面風やさす神なりさつまくで日法になりぬ
いとこの日ぴし紀ましがすさしぴきしかくなく
されるるし天皇さ海に心つようしを元なげし
なさぴいにをましうくぼとそ部にう思らしこと
もまくなにゆうあまもなくてき人わうまれなる
ましこうまさらめ狩あまより海う天山をのとめ
てやわとだしなましとおぼそうとなき風にさも
がされくなと人のりひにくへんまし後の世まで
もがるぐし天名をやながしまてんとおぼしみて
なに愛すもこくなるしさ海なるものこきにく
まつもしやまと見行やむ昌もなくてあ前く新く日

うずまうへて京のかたいとくおぼかなくうくか
ぐらかをたちふらりしほうすやとひぼそくおもか
きやうしらぬしいかゞ竜くもあらぬ宅のうえれは
いくさら来る竜まん人をすし二籠よりうあれが
ちよあやしきまうたまくそおろまいまた竜りひ
まくこふ人のなふうやたふ所読しまく竜くもあ
らぬまづをひつひほへ気しづのおのあれは
むろましうおぼ所新くも我なかうかくしをなく
くしにけるむれほどおひしろ法文まをあさま
しをとやうなれ法のはしまいとぐうふへと
ほるむちしてなかのあるうくなくすん

法云
満風やいふぬくらし思ひ屋る袖おぬらしなき
さなれたろ表にうるしおもしどもう気あれ絶結
へうもひきあくるよりいとぐみきたまさまぬぐう
気くうをむちし法京まとは面風いやあやしき掬
の所としなりとて小んまう忘なとおあかはる竜
しとなんなし法閑に来りぬ上達アなともすべ
てみちとぢてさつりことも絶てすん法なとうり
ぢうしまことあらぬくしうかくまなをや京
れくのあやくおほをむいぶりしまいくなと法
まへにめし出くとえせ結ぐまひ乃面れをやみ
なくぬまく風をとれくふ気いぐほく日法になり

侍をれぬなりぬことにはだどろき侍ならいやうく
地のうことをとれ給ひけるものひ(沙)ふりいりつらのしづ
まらぬことは侍らざるを気なしといやいみじきさ海
まれどろ気おぢてをる(居)りけのいやうきまもむ(原ツ)
おそさそさまさるまけるうくしほく世をほ気ぬべき
まやとおぼさ(原)れくまうれ又の日乃ありほ気よりを
りせいしう喫堀たりうみちて浪のをとろ気
ましいをとも山をのころまじまはしまなり神乃
なりひらめくさ海さらまいとんかくなくておち
うれぬとおぼ持るまあるかぎるまあり(ぬれくとそうれ)人なし
(内侍のツ)
内遣らいりなるほをおしてうくりなし気めば

みらんちくさくまとあひみをうるし気めちの(妻子)
りをみぞ志ぬべ気あやくなぎく君を浦ひをし
つかてなふゆるものあやまるまてか此なれさに余
をぞきをめんと浦よく聞しかをやいと物さし
しけれ(ハ)ゆくのをて(窒ノ弊)ぐらぬけさをのてをしよ
志のうをを気ありひをしづめたりを給まことに
泣をされのふ神ならぞたすけ給ひとれほく大和
をさてのふをの(法供ノ会ノ事)くしづかしの余をぞさるこの
まくあられ所(原)力の又なる気れぬまとづ見給ぬ事ま
ことれいはしうりすしきふひをれしてすこし
掴おぼ持るうぎり之力まりへてあの所力ひとつ

をすくひたてまつらんととよみてもろこゑに仏神を念
じたてまつる帝王の深き宮にやしなはれのそし給ひて
たのしみにおごり給ひしかど深き御うつくしみ
おほやしまにあまねくしづめるともがらをこそ
うかべ給ひしか今なにのむくひにかここら
よこさまなる浪風にはおぼほれ給はん天地ことはりし
給へつみなくてつみにあたりつかさくらゐ
をとられ家をはなれさかひをさりてあけくれやすき
そらなくなげき給ふにかくかなしき目をさへ見いの
ち尽きなんとするはさきの世のむくひかこの世
のおかしかと神仏あきらかにましまさばこのう

愁へやすめ給へとみやしろの方にむきてさま
ざまの願をたて給ふ又海の中の龍王よろづの神
たちに願をたてさせ給ふにいよいよなりとどろきて
おはしますにつづきたる廊におちかかりぬほの
ほもえあがりてらうはやけぬ心だましひなくてあ
るかぎりまどふうしろのかたなる大炊殿とおぼ
しきやにうつしたてまつりて上下となくたちこみ
ていとらうがはしくなきとよむこゑいかづちに
もおとらずそらはすみをすりたるやうにて日も暮
れぬやうやう風なほり雨のあししめりほしの光も
見ゆるにこのおましどころのいとめづらかなるも

海たるさ海あらゐてなどかくわやしたれ
はとのまうぞやてはほ手をとりてひ気さて海侍者
のあまのみちはきまくまくやあ出してあの海
はさるまねとの海りすいやうましくてうしあれ海
の海はわうまをわましこなるさ海ぐうるし気
ことれおなく侍まハ今さ此なれさに方をやまて
侍りおましとやまし海へれいやままじ気まし海まを
さぐいはくりなる掬のひぐひなり我ハ位にまし
時わやまつことなるしうやをのづしおりあり
それうの海をを終つるなやいやまなくて此世を
人をみさるまつまといみしきうまるまをづひをみん

おはさへぐくて海にいつまなれはかのがまいく
見こうしまるまどあくれはぬでは多いまそう
まへまことのあるにはりてすんいうぞのがまぬ
なとてさらさるまぬあるぐうるしくてはとまに
さりすんとなれへのてみあ海海へまぞんもなく
月のうなのこさくくやして夏のひちもきぐ海
きさひとまれろひちして室のやあまれにたるぐ
なるま年ぐろ夏の中にもみなるで悪しくおぐはり
なれ海さ海を月のうなれとはぐりにみさきあり
はるのこおもう海におぐはこ海くはりぞくうるし
ひとさまめ食はまなんとしつるをとさすけにう海

つまのへつと衣はれをまよくづうつうさしぎをあり
なりとゝ姉たのもしううましうおぼえ給ましか
ぎりすしむ月門ぞふくづつまさなかくなら法心下
どひよう法くのうれしきこともうち見すれ行ゆ
めにも法いらへをつゞまうしやうすなりぬるこ
とくいふせさに又まゝやみし給ことさうまねい
つ給ゐとあるに法めをあるであり法気がくるし
なりまなりな紀さまちいさやりなる所をよせて
人二三人づりちのみ居しその法座をさしてく本
まなに人なんとくへぞあしの法ありされの
君をしぐちの法所ようひて海のまゝる也源ケン 良清
あふひ給ひぐ多いめんしてことのむとるまゝ
さんといふよしきよおどろきて入道をかの国の
日 知音 とくいまく年ごろあひかくらひ給しかぞかくな
しまいあくうあひうらむる事給くことなるせう
うことをだにかくへさでゆくうなり給ぬるを 私イ 法の
まぎきまいりなるもしかあらんとおのめく 法 君の
法愛なともおぼしあるまうことあるてあやあ
ゐとの給へぞ所まいまそあひさゐさづつまを所し
うつまほう浪風まいけの君すう所でし給つらんと
仏ぬがくう思へ里いぬろつい 三月朔日上巳ノ日ノ一 さらの日の夏ア
さ海ことなる物の法をしらまうことを給しうぞ

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』　請求記号
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号
ガラス使用

まがほ力のありさ海をなげしいでられて夏のむ
ちしほふまくまゐ氣からしぬへろこ思をむまこ
くやのみふる人を海もとくめあへを思ひしひ
さうのあやくまふやまく入道ひ里の法師になり
ていやおしう先づらし氣でひとつふる法ひ氣い
でそれ御の法ことさいつまれそまこしひ氣法
をさ海ぐいこしうのを思やしこまいやあしを
やくぬ物のねぎまおつまうこうしまきろ掛なら
をはるぐと物のとぐあるなるなれ海ぼうなるま
なりく春秋の花ぬ葉のあつまなるつまいこう
こうりやなうしまけまるり事どをなさめりしきに

くぬなのうちさく氣こうそうかあしてと妻に
なぐ也ねをいやまなういぬろ理どをいやなぬ
りしうひ氣なりしこうを御むとさつまくあまを女
のなつりし氣さ海まくしどけるうひきこうこう
おりしけまと大ぐるくまの法を入道をあいおうけ
ゑをてあうりすよりなつりしき積なるをいぬこ
のり給へんなにりしう遠藤の御てより引法こへ
こうこと三代にまんなりぬるをうけるなれ方
まくこれ世のことをまて思ぬるを物のきろう
いふせ氣おりくまそう氣なら志給しをあやしう海
ねぶ掛の給ようまねんまうのおん大王の御てよう

はやいさゝかものし給ふ由の手ひとつふたつはじめ給へるにい
せの海ならねどきよきなぎさにかいやひろはん
なと声よき人にうたはせて我もとき〳〵拍子とりて
こゑうちそへ給をきんひきさしつゝめできこゆ
御くだものなどめづらしきさまにてまいらせ人〳〵にさけ
しゐそしなどしてをのづから物わすれしぬべき夜
のさまなりいたくふけゆくまゝに浜風すゞしうて
月も入がたになるまゝにすみまさりしづかなる
ほどに御物語のこりなくきこえてこの浦にすみはじめ
しほどの心づかひ後の世をつとむるさまかきくづし
きこえて此むすめのありさまと

はずがたりにきこゆをかしき物のさすがにあはれ
ときゝ給ふふしもありいとゝりまうしがたき事なれ
どわが君かうおぼえなき世界にかりにてもう
つろひおはしましたるはもし年ごろの老法師の
いのり申侍る神仏のあはれびおはしましてしばしの程
御心をもなやましたてまつるにやとなん思ひ給ふるそ
のゆへは住吉の神をたのみはじめたてまつりてこの十八
年になり侍りぬめのわらはいときなう侍りしより
思ふ心侍りて年ごとの春秋ごとにかならずかのみ
やしろにまいる事なん侍るひるよるの六
時のつとめにみづからのはちすのうへのねがひ

ほくあひく
（保）そちこちもものこゝろゆきなく
やうのこまかにそそゝかしきこえ（文明）よりも
入道もえしもはねやのあるじそうの家ぬしも
おもほすれハ（ハ）源侍いとまうでまうでゝ（ニ）ハ）
いとしのびに（ク）ゆるしやうにもあらねハ
らうきうひいきやうにて（保）まいりつゝ
ゆいでんのまうのぼりもいとまなくて
ものゝ（ノ）かのほとりにしたしうつかうまつれる
てらうとやうにわりなひとびとくへ（文明）道
きもの中びてゆるりくよりくみうさをあらや
文よみのもとうびゆるしこゝろふかうん
なうむらうんをぬきなるゝ（イ）ハかりて申モスキ（ニ）キト
ゝ思ひなるらんとうんみ給ふ
やもやうしものみちのくふかうきうるう
れやうさ海ようをきゝ（保）ひけることすれたるの
なとのさまうみのふ（保）ひなくくるゝ
ゆもなうみ（保）をそゝまるの日せん（保書心）
らひうんらく
（保）いとをくも心ゆる物となやひうる
やとよくもなをこゝろ（ソヒクさこと）
（先始ハ実心次ナシ見セ玉ヒ）
ゝうすやうよいやうくけふうさゆうの

きんのめでざんもいやめさまひれいくらん絶
でこしとそ見まどなどらひなりぬ力のをやのい
みじうりひなけまへなりくをふあらそのやさぐ
ねしまを給ふにまく涙ぐまれてさしまゐのどう
なれをまめていしねくあさうしすをめらむし
されのうしまとこ侍気おくうをくまさうして
思ふらんものをやくよいりまさぐ見ぬ人の
きくうなやまんでのさ海ゆ気さ海なとやんごと
なれ人にいなりをとるまじう上をめ気さ京の
ことおぼえておりしと見給へどうちし気まくけり
そさんも人めにくましけまそ二三日逢ざくけく

つれぐるる夕ぐれもしそこの気なりぬものなと
亟うにさぎらはしておりくく人もおすじ心にみ
まぬべき気をくしたりまくり気うたし給ふく
をなりうすむ物うく思ありまたりしまもみで
そやまじやおぼそ掴りうよしきよりうもやうして
りひしけしきとめさましう年法あらんぼまく
あらんをめのまへに思ひさりへんいとをしうお
ぼしきれて人すくみ気をやはるかくまく
もまぼらしてんとおぼせやぬ女をくなりくやん
ごとなれきその人よりをいくう思ひわりまてね
さけにありてましまれそむくらべまくそまる気

けり京のあとも絶つく関邑ぞかくいよ/\おぼ
つかなく思ひ給へらるゝのみまさりかれ
まくもありなん思ひてやかりへまかりておもしと
おかしよそおもくあれとさすかにかくてや
年をそへはん命さへは人目ろうさきもそなやかれ
かしこまりあるかれとしおほやけに物のさとし
しきりて物さはかしき事おほかり三月十三日
神なりひらめき雨風さはかしき夜みかとの御夢に
院のみかと御まへのみはしのもとにたゝせ給て
御けしきいとあしうてにらみきこえさせ給を
かしこまりておはしますきこえさせ給事ともおほかる

源氏の御事なりけんかしいとおそろしういとほ
しと思して后にきこえさせ給へれはあめなとふり
空みたれたる夜は思ひなしなる事はさそ侍る
かろ/\しきやうにおほしおとろくましき事
ときこえ給ふにらみ給しにめ見あはせ給と見しけ
にや御目にわつらひ給てたへかたうなやみ給
しこ内にも宮にもかきりなくせさせ給太政
おとゝうせ給ぬことはりの御よはひなれと次/\に
おのつからさはかしき事あるに大宮もそこ
はかとなくわつらひ給てほとふれはよはり給やう
なるうちにおほしなけくさま/\なり

あの源氏の君の御ことふをうすことなれまくうく
しづむならざ[かイ]ならびあのひくひきなんとすん
だけれ[ゆうイ]ふ今もなをりとの位をも給てんとよび
よびおりの給を世のきどきあれ〳〵ゝ気やう
なる道に御ことにおちて都をさるし人を三とせを
だにまぐ御せ捨るさまんことは世の人もいかぐ
いひつそ人給らんなと[雲石]言かくうつさ絶給ふおも
りしまぐうるなどは月日うさなりて御なやみど
もさ御〳〵におりまきさらを給ふ岡石にまゐ入
社をはさ風のことなるにひとつ孫もまめやうに
その日びしくて入道ともおりく[ゆるしラコナタヘト源ノ玉ノ]そらせ給と

ううまぎらはしてこちさいらをよとの給てまく
[源詞]
里給りんもしをまゐるまじうおぼしたるを[さう]
[明云上]しきるにあらに里さつ道くもあらびいやくらお
し気さきの内中人ようるまくこまろ人の
うちとけことに御気てさやうにまろらうに所く
らふまぎをもなれ人うずまと御ぞ御まざん物
ゆへ我そいえじ気抱思ひをやうへんうくをよび
なれしを思へ分おやさらをよくり世てまぐ年
月こうあひなだのみに行忘むにくく思ふらめ中
中なるあらうをやあくさんと思むてこぐあの御
におもしきんなぬてうる御文ゆうをやしうしさんこ

うとろのなしねとしろをとまのこさしてけれ
かしさる人のはうりさまをおのゝふもみなりん
なとはかのふ思ひ申しとかく思ひのあさまし
はすかひまくおはすかねとほのうかをみなりせ
まなれ掲と雪けてつかしはこのねさとも周まはをを
てさし南意の法ありさをおはしけりなりしてうく
までをまおれ掲とおほしつかるなとしそうる
あかの中にくちめくりおあまるこゝとなれなし
思ふまゝよくまつりて我とまちのきこしさ
思ひよらずおやふかくらの年ころのかれ
かめのうなふへきえをとなけのかゆくまかふれをなり

ておはしましまへあらじかゝりのなけるかけきをり
きれと思ひ至るは掲しくそうそしまれ人と雪也
ともつくうゆみすうもまへきをめふつえゝ仏神
とたのこなりてくのはむともとくせをともちて
なとうらむて思ひなされそむ思やうの法の涙の
をとまりの物の心をきこしやさしうすさうひなく
こゝなしつゝ心の底思てよろし今日こそもしき
心もとなく思まつらるゝをときこえいますへしなと
またおしきをひもとけはさらぬうへやくいう
ちからひて十三日の月の花やかにさしいくら
まさしわさし趣おもつりやうしちまとをすれのさ

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号
ガラス使用

保人
ひまぐにはじめてあまれまなかりしうまぐみ耳
なれ給ひてなどひやまし給ひ給ひ御しほ
ありずなどさ給ひまを月ごろなとしぬてきく
なりぬ事つゝんせくやしうおぼさるゝ心のうち
事ゆされの繋りをのこし給ひさんをえうち給ひす
給までのうくみまとの給ひ女
明石 る給ひさまにたのめをくめる一ごと給ひ給ひをぬ
ねまやうあて志のたんいふとこなれらすきみ
をみ給ひ
保 あふ事てのかくみまちまる中のをのしへ
そこにふうりうざうまれ此ねさうぐまぬされり

うからぐあひみんとたの先給ひのされどこぐわ
かまんほどのまりかさ給ひ山をこるもいせこと
けるまなりこら給ひの御気を頼りうりいぐなて御
山の色の人にもはぐしなれ心も定まれせ人を
をたうらひて
保 うらをてくらもりれしまうらかみのかあ事
ゆりまと思ひ屋るりか御人へ事
明石 としへ御るとをやもあれさうまうかこの事ゆる
かくまやかをとぐへましとうち思ひけるまくや
けるを見給ひ思ひ多へどほろ潤せくとあぐ連ぬ思
らぬんてハ給ひる御すをぬなれど年此とりふ

つりなれ(訓)ぬるを今ゆゑおぼそハさもあるかもしう
しなとみをうよしきよなしハをろかなしずれ
おもをかめりしとふくそ思うましきまもけに
はふをうきつまはなれさを別れくことなと哀り
つまくくらくしたくれいひあへろふゆくえあめ
つまされどなりしとくすん入道はふの所まうきい
やりのしうけりうまつまりんとしこのしかを
さびのさうぞくぞつくしきさ海なりいけのまに
りし(仕)あへきんとみしらと浦(原ノ)ようひをいふ道くも
あらひみそひつ(櫃)あまこの手あふらりすさことれ
部のつやましつ道よ浦をくら掬なとゆへ(主くシクモナシタルヽ)所見て

思ひよるぬくさすしはふさそ下所へ来るもの
浦さううくに
入道よるなきふさらうさひ衣志ゆやはし
とや人のいしらんとあれを浦(原ノ)らんしけきくさし
りしけまぜ
源うくみふうかへ(スギカヘテ秋見ニトメ給ソムトニ)へうまけるあふことの日数へ
多てん中のむをむさしあるをとそたてさらの(稽)ぬ
浦方にすれこうどもを所うたびきふいてひとん
志のだれ語べきことをうふろうくこかのりしか
らぬ浦ぞよりひのうけまたらをいぐ人のむまと
志めざん入道いてゆやせ世我もなれ絶りし方なれ

どもけふの御をくりふ御のうまつらぬ事なと
申て御ひをぼくるもいやをしなぐらしきの
そまうひぬべし
世我うえまあくらむかしむかとなりてる我は
きしをもこそあれまねしのやうまいとぐさどひぬ
面く結まんさうひまでだまとゆもしてすれぐし式
さ後なれどおぼしいぐさを結おるゝ御なと御
ひしき行はるいうしうそのをあられやおぼして
とゝろぐくうちあのみのへろ恨まえのまゝりなと
いりんかくなくみも語忌まで懐姫ぐく式すぢもあめ
まんといとく疾えるをし行てんさ此すうりよう

みまてぐくけまいぐまべきとく
みやこいてし春のなけきふにとゝめや年ふる
満をまりまぬる秋とて をしのこひ源へ行ぬ
物おぼしずしたまきまさりぬしあさ御しう
ゝろ行ふあうじこのひちそ及とふべ式ゝくなく
てうしも人はみしじと忌しづむまど力のうち式
をもとまくまりなれこしなれどうちまて源へろ
うゝろんの屋るかくなれまたもう弟うひて見すれ
ぐくきまたをれあやくそこ波まさづめりまく
ゑもなぐあめわびて八なまくりくしづくしなる
事を思うめきんすべくひぐくし式人ましゝの

ひまけるゝ心のおこさうぞやいふ（入た河剤スル）あれ（ハ）ゆかや（ハ）
志をつまじきまし志ものし給めまゐさるとこれ
ぞを不あらん思なく（旧石上ヲ）さのてはゆ（湯）なとをこふ下い
れあ（ハ）拵（イニイニシヤ）しやとて不さきにしるゝ（入た）ぬをもめれ
と母君なとひ（ハ）ゆるゝ心をいひあり愛はくいつゝ
いりで志さ（フ）海まくみをしんやとし月をたのこを
ぐしいさや思（ヒ）りなふやこう（ハ）たのこやもしはまむぐ
おし式をと紙を物のはじめにみるりなとなげく
をみるまといやをしはれいとゞ（ハ）けられ（かれられとろ）ゆるゝ
自己とひいをのこねくしよるをもぐようにた
きのくずぐの行志（シコナイモヲ）をしらずなりにけり とて手を

をしすりてあふ（シ）きぬさゝでしどもまあぞめられ（弟子）
て月夜に出くさやうだうすら（物ハ流字之只行道スルニ）拵やるを火にさふ
まいるまうしけりよしあ（ハ）出乃くろぞにあしを
はるうこるひやそ（入た）ふしさる程にもしんをこしとの
まぞれけら君（係）をなふものくにまさりて所（ハ）
へし活く住者にと多いらうまくの歎をたし
中へ（ハ）ぞよし所使してやさを活（フ）まさりに不せう（遠云）
てこづりしあのさびしまうぐ給さびことなら
所せう（めたい）思うなとなくていうぞ（京へ）いるゝのぬ二条に
おもしまし つきく実この人も御とも乃人も夏の
ひちしてゆ者あひよろこびなれ（泣）も拵（イニイニシキ）しまぞ

原

うきつくをうつしやをまつ
神のひそうをありけれ
こうなれもれとうきれ
とうのしろさやうのふ
給のう花うちなとまも
そなぐうなくうう

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』　請求記号

ガラス使用

国立国会図書館

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号

ガラス使用